

美術教育をめぐる時代の潮流：極私的分析

早稲田大学 教育・総合科学学術院 准教授 大泉義一



※今年度より，全美協の仲間に加えていただきました。よろしくお願いいたします。

1. はじめに

急激に変化する世界において，わが国の美術教育のあり方があらためて問われていることは周知のとおりである。とりわけ学校教育と同時代社会のかかわりを，これほどまでに自覚しなければならない状況は戦後かつてないのではなかろうか。本稿では，そうした美術教育をめぐる時代の潮流に対する筆者の極私的な分析を行う（あくまでも“極私的”です）¹。

2. 時代の潮流：「これまで」

はじめに，戦後の美術教育が「これまで」に果たした役割について確認しておきたい。その一つには，教育観・子ども観に与えたインパクトがあると思う。表 1 のように，児童生徒が「図工・美術が好き」であるとするア

表 1 「小中学生の勉強に関する意識調査」バンダイ（2019 年）

小中学生総合TOP5					
好きな教科			苦手な教科		
1位	算数/数学	25.1%	1位	算数/数学	24.0%
2位	体育/保健体育	20.1%	2位	国語	18.8%
3位	図画工作/美術	18.1%	3位	体育/保健体育	9.9%
4位	国語	16.9%	4位	社会	9.7%
5位	音楽	14.0%	5位	英語(外国語活動)	6.1%
他	特にない	20.8%	他	特にない	32.8%

ンケート結果はよく目にするところである。これは，美術教育に関わる先生方が子ども一人一人の表現の機会をしっかりと保障してきた証左であろう。目を海外に転じてみると，日本のように教育課程に美術教育が必修教科として位置付いている国は稀である。さらに最近では，アジア諸国の美術教科に日本の美術教育を参考にする動きが活発になっている。筆者も 4 年前までブータン王国における造形教育の調査研究に取り組んでいた²が，そこでは JICA の活動によってナショナル・カリキュラムに Arts が位置付けられ，教科書が編纂される経緯を確認している（図 1）。ここでも，いち表現者としての子どもを育てるといふ，日本の美術教育が掲げてきた理念の確かさを確認することができるだろう。

3. 時代の潮流：「これから」

では、現在から未来にかけてはどうだろうか。身近な話題として、やはり気になるのは「学習評価」だろう。学習指導要領の改訂で育成すべき資質・能力が明確化されたのに伴い、評価すべき資質・能力も3つの観点に整理された。この整理はすべての教科・領域に共通していることから、教科横断が前提の融合的な学び、さらには教科再編までも予感させる。さらに芸術教育の文化庁移管が話題になった。これまで文部科学省が所管していた「学校における芸術に関する教育の基準の設定に関する事務」を、新たに文



図1 ブータン王国の図工の教科書
(2016年、筆者撮影)

化庁に設置された学校芸術教育室に移管することになった。これについて文化庁からは、「文科省からの格下げではない」、「表現教科は、中教審が責任をもち、文化庁が扱うのは博物館のみ」、「(移管は) 芸術家を生み出すことが目的ではない」との説明があったということだが、美術教育をめぐって今後何らかの関連した動きがあることは事実である。また、はやくも次期学習指導要領改訂に向けた検討も行われている。「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(第110回)」においては、「Society5.0時代を見据えた芸術教育の在り方」が議題に上がり、音楽教育、図画工作・美術教育に関する報告がなされた³。それら報告を受けた当会の副会長である市川伸一氏からは、「芸術教育に一定の理解」を示す反面、「芸術教育が他の教科にどう生かされるのか」、「芸術系教科間(音楽・美術)の関連はどうか」という課題が投げかけられたという。新しい学習指導要領の完全実施を待たずして、次期改訂に向けて考えねばならない事態になっているのだ。また今後は、「Society5.0」と美術教育の関係も考える必要がある。政府は、実際に「Society5.0に向けた人材育成：社会が変わる、学びが変わる」という報告を出し、教育への要請を行っている。その中で、とりわけ美術教育と関係する課題として挙げられているのが、STEAM教育⁴の推進とデザイン思考の必要性である。いずれも高等学校から大学の教育に取り入れるべきとされているが、その前提としての幼稚園、小・中学校での学びがどうあるべきか検討の余地があるだろう。

4. 気がかりなこと

以上のような時代の潮流においては、美術教育が「これまで」に果たしてきた意義と役割をふまえつ

つ、「これから」の美術教育を展望してゆく必要性のあることは自明であるが、その前に筆者が気がかりにしていることを述べておきたい。

まずは現在検討されている「学習評価」に関して、である。その要点は「育成すべき資質・能力＝評価すべき資質・能力」を明確にして授業設計、授業改善を行っていくことにある。筆者は、この考え方と近ごろ目にする事の多い「逆向き設計論」⁵に親和性を見出している。逆向き設計論では、「何を身に付けさせたいか」という教育の成果から「逆向き」に授業を設計する。すなわち、求められている結果が明確にあり、そのために必要な根拠を考え、それを具現化する学習経験と指導を「逆向き」に用意するのである。実はこうした考え方は、わが国の教育において、すでによく実践されていた。それは、戦時統制下における美術教育においてである。図2は、1943(昭和18)年に発行された図画の教科書の見

開きページである。左ページに示されている学習内容は、現在の中学校美術科でも扱われている色彩に関する知識事項である(同時対比)。続く右ページには、その知識事項が実際の生活場面に活用され

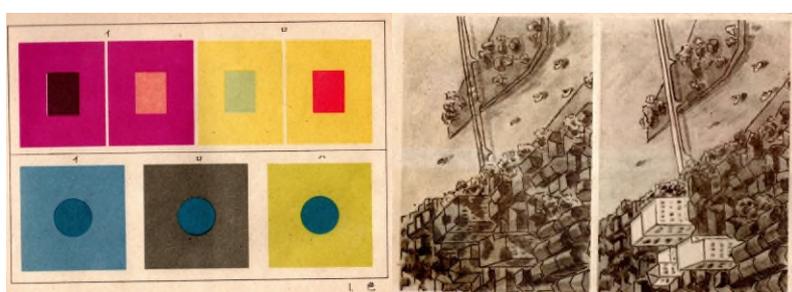


図2 『初等科図画四・女子用』1943(昭和18)年
(右ページは90度右回転して参照)

べき機会が図示されている。そのキャプションは『どうすれば敵機に見つからないか?』である⁶。もうお分かりかと思うが、ここには当時の戦時統制によって明確に求められていた資質・能力の育成のための学習経験と指導が、見事に「逆向き」に用意されているのである。

さらに、「学習評価」の基本構造にも気がかりなことがある。それは、育成すべき資質・能力の一つである「学びに向かう力、人間性等」が、観点別学習状況評価(以降「観点別評価」)の観点としては「主体的に学習に取り組む態度」となり、「学びに向かう力、人間性等」に含まれる「感性、思いやりなど」は観点から外され個人内評価で扱うとされていることである(図3)。もちろん、この扱いは以前からそうになっており、変更があった訳ではない。しかしながら、教科目標に掲げられている「感性」が観点別評価になじまないと解釈され、「学習評価」とはすなわち「観点別評価」(のみ)を指すものと捉えられてしまう危険性を感じてしまう。

同様に、新しい学習指導要領の命題として掲げられた「社会に開かれた教育課程」にも懸念することがある。安彦忠彦は、「社会に開かれた教育課程」をカリキュラム論から検討している⁷。まず「社会に

開かれた教育課程」を実現する要点は、①社会と目標を共有すること、②社会の要請に応える資質・能力を育てること、③一般社会の教育資源の活用や社会教育との連携を図ること、の3つにあるとしている。その

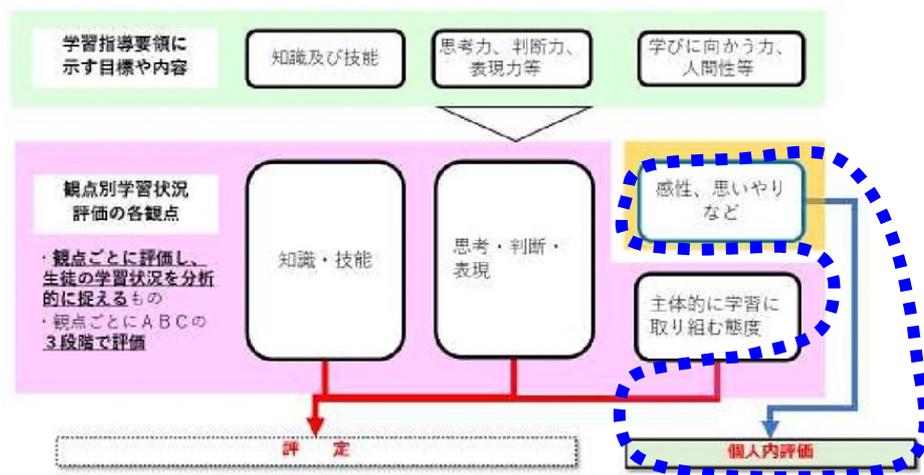


図3 各教科における評価の基本構造（点線部筆者）
（中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会，平成31年1月）

上で、①、②においては、公権力としての国や地方自治体の行政が行う公教育と、私人としての一般市民や保護者、企業家が行う私教育との区別が曖昧になる危険性が存在することを指摘している。さらに②においては、国が“直接的に”学校に対して“社会に役立つ人材”の養成を要請することにつながり、結果としてそこには「学習者の視点」が欠如することへの危険性が存在することを指摘している。つまり、教育における公私の区別があいまいになると、私的なことへの「介入」が行われる危険性があるのだ。

5. 美術教育の行き先に関する極私的提言

以上、美術教育をめぐる時代の潮流において筆者が気がかりにしていることを述べた。それでは、これからどうすればよいのか？最後に（極私的な）三つの提言をしたい。

一つ目は、当たり前のことだが「子どもからはじめる」ことである。ルソー、デューイ、フレーベル、ペスタロッチなどの先達の足跡を見れば分かるように、そもそも教育学は教育現場における実践探求から生まれ発展してきたものである。そこで、ここでは教育現場のカリキュラム観の転換を通して「子どもからはじめる」ことを提案したい。「カリキュラム」は「教育課程」と同義的に扱われることが多いが、元来、「教育課程」が「事前の計画」を指すのに対して、「カリキュラム」には加えて「事中の更新過程」も含んでいる。つまりそこには上述した「学習者の視点」が存在することになる。かといって、多忙を極める教育現場の先生方に計画を随時更新することを求めるのは酷である。そこで、まずは《事前：更新》＝《9：1》を目指したい。また「更新」には“題材開発”だけではなく“授業改善”も含む。年間指導計画で配列された題材を、目の前の子どもの実態に合わせて日々改善することも「子どもからは

じめる」ことである。

二つ目は「美術のミカタをふやす」ことである。筆者は、これまで10か年にわたり、学生たちと様々な場所で親子向けの造形ワークショップを実践・展開してきた(図4)。その10年間のあいだに、ワークショップに子どもと一緒に参加しているおとな(保護者)の関わり方や意識の変化を感じている。以前は、子どもを預けて買い物に行ったり、子どもの活動を



図4 筆者が学生と取り組んでいる『アートツール・キャラバン』(2017年、川崎)

を眠そうに遠くから眺めるだけだったり、反対に過干渉で子どもが委縮してしまったりするような様子が多く見られたのだが、最近では子どもと一緒に楽しみながら自然な感じで活動に参加したり、子どもの活動の様子を面白がったりする姿が多く見られるようになった。このように子どもの造形表現に対する大人の意識に変化がみられる今こそ、美術教育の意義を理解してもらえるチャンスではないかと思う。また、学校が所在する地域は人材の宝庫である。筆者は、いくつかの公立学校の運営評議会外部評価委員を務めているが、そこでは地域の方々が、それぞれの持ち味(時には教員よりも高い専門性)から教育活動に参画している。もはや学校だけで子どもを育てる時代ではないのである。そのようななかで、学校の美術教育のあり方が問われているのだ。筆者が教育現場の先生方と取り組んだ美術教育における社会に開かれた教育課程の開発研究⁹において、ある中学校の先生は『育てる子ども一人に対して、センセイはたくさんいる』と語った。ここで述べられている「センセイ」とは、自分自身だけではなく、学校の同僚、地域の方々、保護者、そして児童生徒同士のことも指す。すべて「ミカタ」になり得るのだ。

三つ目は、「今こそ、個人内評価を」である。先述の通り、「感性や思いやり」は観点別評価の観点には含まれず、個人内評価で扱うことになっている。その重要性を、今一度美術教育から訴えたい。かつて中学校の美術教師であった筆者が、2年生に対して木彫の授業を行ったときのことである¹⁰。授業にほとんど参加しない学校一の暴れん坊がいたのだが、この木彫の授業だけは出席し、さらには既定の授業時数を超えてもなお、他の学級・学年の授業の時間や休み時間に美術室



図5 子どもの表現の事実

の隅で制作を続け、ほぼ半年かけて作品を完成させた(図5)。さらに工具に関心がある彼は、木彫ノミの刃を研ぐ手伝いにも打ち込み、学校のすべてのノミを完璧に研ぎあげたのである。この彼の「学び」は、観点別評価で評価されることは、決してない。しかし、確かにこの子は、筆者の目の前で学んでいたのだ。この事実をすくい取ることができるのは個人内評価である。観点別評価では捉えきれない子ども事実—そこには、その子の感性、人間性、やさしさ、豊かさ、そして時には“無駄”とされる出来事なども含まれる—を大切にしている学校教育であってほしいと切に願っている。そしてその理想に向けて最もよく実践できるのが、美術の時間なのではなかろうか。

註

- 1 本稿は、昨年11月に横浜美術館で開催された「第46回神奈川県公立中学校教育研究会美術科部会研究大会(横浜地区大会)」での筆者の講演内容を基に再構成したものである。
- 2 下記論文に掲載。
 - ・大泉義一「ブータン王国の造形教育：GNHから見出されるデザイン教育としての可能性」p.127-134, 2012, 大学美術教育学会『美術教育学研究 第43号』
 - ・「ブータン王国の造形教育Ⅱ：実践研究を通じた造形教育の可能性の検討」pp.71-78, 2013, 大学美術教育学会『美術教育学研究 第44号』
 - ・「ブータン王国の造形教育Ⅲ：初等教育における新教科“Arts”の導入と受容」pp.97-104, 2016, 大学美術教育学会『美術教育学研究 第48号』
- 3 美術教育からは、福本謹一氏が『美術教育の社会的役割期待の拡大』、中下美華氏が『図画工作を通して子どもを育てる』と題した報告を行った。
- 4 Science(科学), Technology(技術), Engineering(ものづくり), Art(芸術), Mathematics(数学)の頭文字を取った造語。「STEM」教育に芸術(Art)を組み込み、学習意欲や創造性の向上を目指した新たな融合教育として2007年頃から欧米などの諸国で活発に実践化している。
- 5 G.Wiggins & J.McTighe, Understanding by Design, 1998,2005, Association for Supervision and Curriculum Development ASCD
- 6 この教科書に対応する当時の指導書(図画工作研究所『芸能科図画工作重要問題解説』図画工作株式会社, 1941)に記されていた。
- 7 安彦忠彦「カリキュラム論からみる『社会に開かれた教育課程』」, 『新教育課程ライブラリ vol.11』pp.55-56, 2016, ぎょうせい
- 8 ロバート・フルガム『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』2016, 河出文庫
- 9 その成果は、下記冊子にまとめられている。
大泉義一編著『図工・美術でゆたかな暮らし』2019, 日本文教出版(下記でも閲覧可能)
<https://www.nichibun-g.co.jp/data/education/e-other/e-other023/>
- 10 当時はまだ中学校美術科の授業時数は、第1学年、第2学年ともに週2時間であった。